

様式 C-7-1

## 平成24年度科学研究費助成事業（科学研究費補助金）実績報告書（研究実績報告書）

1. 機関番号 

3	2	6	9	2
---	---	---	---	---

 2. 研究機関名 東京工科大学
3. 研究種目名 研究活動スタート支援 4. 補助事業期間 平成23年度～平成24年度

5. 課題番号 

2	3	8	0	0	0	6	2
---	---	---	---	---	---	---	---

6. 研究課題 地域生活する脳卒中障害高齢者の生活適応モデルの構築

7. 研究代表者

研究者番号	研究代表者名	所属部局名	職名
9 0 6 0 8 6 5 5	ニシノ ユキコ 西野 由希子	医療保健学部	助教

8. 研究分担者

研究者番号	研究分担者名	所属研究機関名・部局名	職名

9. 研究実績の概要

<p>目的：脳卒中障害高齢者は自宅に戻った後、どのように生活に適応していくかというを理解する。</p> <p>方法：対象者：関東近県の男性16名（平均年齢74.2歳）、女性13名（平均年齢68.5歳）である。調査方法：対象者の自宅、または対象者が指定した場所で、半構成的インタビューを実施した。インタビュー内容は録音し、逐語化したものをデータとして使用した。分析方法：修正版グラウンデッドセオリーアプローチを使用し、分析テーマを「脳卒中障害高齢者がどのように日々の生活を構築し、前向きに人生を捉えるのか」とし、分析焦点者を「前向きに人生を捉え活動的に生活している脳卒中障害高齢者」として、得られたデータを理論的サンプリングし、質的に分析した。</p> <p>結果：カテゴリーは1「負に捕われる時期」、2「広がり」、3「脳卒中後の変化」、4「自己像の不変」、5「生きる意味の探求」が導かれた。1はできないことに目が行き、疎外感がある時期である。2では、些細なことが徐々にできるようになり、行動範囲が広がり、関係性も広がっていった。対象者自身が周囲の助けを得ながらも試行錯誤し、挑戦し、社会参加していく時期である。3と4は、自己像は変化していないものの脳卒中を機に考え方等の変化があり、2の経過と相互に影響しあいながら形成されていくと考えられる。1～4の過程には常に5が並行してあり、初期の「なぜ」という問いからその意味が見え始め少しずつ変化し「人生に満足する」へと経過していった。</p> <p>意義：対象者の語りの中に医療や介護保健サービスの支援はほとんどなく、自身で試行錯誤し家族や友人等の助けを得て人生を満足できるものになっていることである。支援者は、彼らのこの潜在する能力をエンパワメントすることが重要である。また、この結果は、これまで死の受容過程を参考に考案された脳卒中障害者の障害受容過程を再考するものとする。</p>
--

## 10. キーワード

(1) 脳卒中

(2) 適応過程

(3) 高齢者

(4) 地域

(5)

(6)

(7)

(8)

## 11. 現在までの達成度

(区分)
(理由) 24年度が最終年度であるため、記入しない。

## 12. 今後の研究の推進方策

(今後の推進方策) 24年度が最終年度であるため、記入しない。
------------------------------------

13.研究発表 平成 24年度の研究成果)

雑誌論文] 計( 0)件 うち査読付論文 計( 0)件

著者名		論文標題			
雑誌名	査読の有無	巻	発行年	最初と最後の頁	
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子)					

学会発表] 計( 0)件 うち招待講演 計( 0)件

発表者名		発表標題	
学会等名	発表年月日	発表場所	

図書] 計( 0)件

著者名		出版社		
書名			発行年	総ページ数

14.研究成果による産業財産権の出願 取得状況

出願] 計( 0)件

産業財産権の名称	発明者	権利者	産業財産権の種類、番号	出願年月日	国内 外国の別

取得] 計 (0)件

産業財産権の名称	発明者	権利者	産業財産権の種類、番号	取得年月日	国内・外国の別
				出願年月日	

15.備考

--